

私、日本に住んでいます

スベンドリニニカクチ

今、国際的に移民の問題が大きな話題になっています。私たちも、この世界的な流れと無関係でいることはできません。また、少子高齢化が進む社会にあって、海外の人たちの労働力も必要になってきます。一方で、外国人が増えることで、日本の経済や社会、言語がどのような影響を受けるか、という議論もあります。「彼ら」は日本語を話すようになるのか、日本文化にとって脅威となるのか、日本人の民族的アイデンティティはどうなるのか。外国から来る人々を、あなたは、どのように受け入れたらよいのでしょうか。

「彼ら」に、「日本人らしき」や日本的であることを求めますか？
でも、「日本人らしき」ってなんででしょうか？

日本語を自由に話せればよいのでしょうか？

お箸を使って食事をすればよいのでしょうか？

刺し身が好きであればいい？

そうすれば「彼ら」を受け入れられますか？

音をたててそばをすすることができれば、日本人として受け入れられますか？

互いの「違い」を認め合いながら暮らすことはできるでしょうか。それは言葉や習慣、肌の色、文化的背景の違いをとおして、あなたがあたりまえに思っていた一つ一つのことについて、改めて考えることになるかもしれません。「彼ら」が、さまざまな価値観の違いや考え方の多様性を示すことによって、これまであたりまえと思っていた考え方や同質性の枠組みから出ることを求められることもあるでしょう。

私は「彼ら」と友達になって、いろいろ知りたいたいと思います。「彼ら」の思いを聞きたい、「彼ら」から学びたい、そして分かち合いたいと思っています。「彼ら」も日本社会の一員ですし、「彼ら」がいることで日本社会も少しずつ変化していると思います。

私は、スリランカに生まれました。父はタミル人、母はシンハラ人です。つまり、私は複雑で微妙な環境のもとで、ずっと育ってきました。二つの言葉の子守歌を聴きながら眠り、父と一緒にキリスト教の教会に行き、母と一緒に仏教のお寺に行くというような日々でした。

学校の長期休暇のときは、全く異なった地域にある、それぞれの祖父母の地で過ごしました。一つは、スリランカ北部に位置するタミル語を話すジャフナという地域です。とても乾燥した地域なので、「水を無駄にしないで。」と、いつも祖母に厳しく言われ続けました。お風呂のシャワーは、大きなマンゴーの木の下にありました。シャワーを浴びている間に、同時に周囲の植物に水やりをするためです。干あがった土地には水が必要で、人々は生きるために一滴の水も無駄にすることができませんでした。

一方、母方の祖父母が住む南部は水が豊かでした。庭は、いつも緑にあふれていました。いと

5 【アイデンティティ】自己が時間や環境の変化に関係なく、常に連続した同一のものであるということ。自己同一性。

9 【スリランカ】インドの南部にある島国。

9 【タミル人】スリランカで二番めに多い民族。

9 【シンハラ人】スリランカで最も多い民族。

11 【キリスト教】古代ローマでキリストによって始められた宗教。仏教・イスラム教とともに、世界三大宗教の一つとされる。

11 【仏教】古代インドで釈迦によって始められた宗教。スリランカで最も信者が多い。

16 【マンゴー】南アジアで栽培される果樹の一つ。実は卵形で黄色く、独特の香りと甘みがある。

こたちと川でよく水浴びをしましたし、この川の水で村の水田が潤っていました。

村のお祭りも、全く違っていました。五月には、ブッダの誕生の祭りがあります。そのときは、朝六時から夕方六時まで、仏教徒は寺院で過ごします。主に、瞑想、祈り、そして粗食で過ごします。一方、クリスマスときは、父方の家族とともにお祝いをします。クリスマスは特別な日で、教会に行き、親族や友人たちと一緒に豪華な料理を食べます。七面鳥の丸焼きを食べ、ミルクワインを飲んで、クリスマスキャロルを歌うのです。これらの風習は、スリランカがイギリスの植民地だったときの名残です。

異なる価値観や考え方の中で生きていくための最もよい方法は、互いの似たもの、共通項を見つけることです。

二つの文化のもとで育った私にとっては、それを身につけることが重要でした。幼い頃から異なる価値観や考え方を、自分の中で一つにすることを学びました。

異なるものを結びつけるということは、混沌とした状況を乗り越える橋を見つけるようなものです。この二つの文化を結びつけるために川の両端から始まって中央で一つになるような「橋を架ける」ことをイメージするようになりました。橋は、異なる地域に住む人を結びつけます。橋を架けるということは、多様なあり方を認めるための基盤となるのです。橋を架けることによつて、別の世界への道が開けていくのです。

これが、多様性の本質です。多様性とは、両者を壊すものではなく、結びつけるものなのです。私は幼少期から、この多様性の中で生き抜くセンスを身につけてきました。成長する過程で、周囲にある「違い」を認める道を探るようになりました。二つの言葉があるので、二つとも学びました。その他に、両親が使うので英語も学びました。両親は英語が堪能ではありませんでした

が、お互いに話すときは英語でした。スリランカでは、英語は異なる言語を話す人々の共通言語として使われます。このような異なる言葉に囲まれた環境は、豊かなアイデアや習慣や行動を私にもたらしてくれました。

十代のときは、二種類の伝統的なダンスを学ぶ機会に恵まれました。タミル語地域であるインド南部ではヒンドゥー寺院発祥の伝統的なインド舞踊バラタナティヤム、そしてもう一つは、スリランカ中央部発祥のキャンディアンダンスです。

食生活も豊かでした。南部の料理の特徴は、とびきり辛いカレーと緑の野菜でした。四月の旧暦の新年のお祭りは、友人たちよりもずっと豪華に過ごすことができました。ラッキーカラーの衣装を身につけ、シンハラの新年には欠かせないオイルケーキ（キャウン）を食べます。そして二日後に、今度はタミルの親族を訪ね、シンハラのものとは異なったタミルの新年料理を食べます。近隣の人が、砂糖シロップにつけたジャレビというスイーツを、丸いステンレスのお皿に載せて運んできてくれます。それはもう、本当においしいのです。

もちろん、さまざまな困難もありました。三〇年に及ぶ民族紛争では、多数派のシンハラ人と少数派のタミル人が争っていました。家庭の中でも、この紛争に関して互いに対立する意見を見聞きしてきました。どちらの民族の主張が正しいのか、この民族紛争は正義の闘いか……こうした議論は、私にとって生きた「学び」となりました。

そのような議論は、学校の教室では学ぶことができないことです。学校の教科書はあくまでも客観的に書かれています。家庭の中の議論は涙あり笑いあり、そして対立の末に和解にたどり着くという、人間味豊かな感情に満ちあふれたものでした。

これこそが、二つの異なる世界をつなぐ「橋」といえるのではないのでしょうか。戦争の中でこ

2 【ブッダ】悟りをひらいて、全ての人を教え導く聖者。特に、釈迦を指す。
3 【瞑想】目を閉じて、静かに考えること。
3 【粗食】質素な食事。
5 【七面鳥】北アメリカ原産の鳥。
6 【クリスマスキャロル】クリスマススを祝って歌う歌。
12 【混沌】多くのものが入り混じって、どうなっているのかわからない様子。
20 【堪能】学芸や技術などが優れていること。

5 【ヒンドゥー寺院】ヒンドゥー教の寺院。ヒンドゥー教は、インドでできた宗教。
5 【バラタナティヤム】南インドの伝統舞踊。インドの古典舞踊の中で最も古い歴史をもつ。
6 【キャンディアンダンス】スリランカの伝統舞踊。
9 【オイルケーキ（キャウン）】スリランカのお菓子。米粉などの生地を揚げて作る。
11 【ジャレビ】スリランカのお菓子。小麦粉の生地を揚げて作る。
11 【ステンレス】鉄にさまざまな成分を加えた合金。

のような道をつくることは、「彼ら」に寛容であることのすばらしさを教えてくれました。

民族の違いを認めることはすばらしいことだ、ということを理解すること。そして、そのために「橋」をつくることを学びました。橋は互いを理解し、共感することによってつくられます。

私たちが、日本に来た「彼ら」から学ぶことはたくさんあります。「彼ら」は、私たちに変わることを求めないかもしれません。しかし、「彼ら」の存在は、私たちがより豊かな人間になるための力となります。「違い」を知ることが、橋をつくることを学ぶためにぜひとも必要なのです。

一九七〇年代に日本に来てから、私の人生は大きく変わりました。初めは、食料や医薬品などの生活必需品を、どこで、どのように手に入れればよいのかさえ、わかりませんでした。それはただ単に、私が日本語を話せなかったからです。

その後、日本語を学ぶために大学に入学したことで、新しい世界への扉が開かれました。大学で、私は「彼ら」に会いました。「彼ら」とは、海外から日本に留学し、大学の国際学部で学んでいた多くの若い学生たちです。私と同じように、日本社会の中でコミュニケーションをとることができず、私たちはお互いに英語で会話をしました。

そのうちに、いくつかなの変化が起きました。例えば、私はスリランカのカレーを食べるのをやめ、箸を使って刺し身やそばや、わさび醤油のついたフレンチフライを食べるようになっていきました。数か月後には、温かいお風呂につかるようになっていきました。そのうちに、日本人の友達もできました。私をよく夕食に招待してくれた、近所のお医者さんの娘さんもいました。

こうしたことは、私が日本社会に受け入れられるために変わっていく経験となり、一歩ずつ前に進んでいきました。一年ほどたつうちに、母国語よりも日本語を話すことが多くなりました。英語は、大学のクラスの中で話す程度になりました。

15 【フレンチフライ】じゃがいもを食べやすい大きさに切って揚げたもの。フライドポテト。

こうして日本社会に溶け込むようになっていきましたが、それは同時に日本社会での「外国人」というマイノリティーになることでもありました。スリランカ人で褐色の肌をした私には、日本社会の中で自分が属することができるようなグループはありませんでした。そのかわり、私はすぐに一人の「個人」となることができました。「個」としての自分であることを学んだのです。これは、今までに経験したことのない感覚でした。

ときには、自分の中の古い自分と対立することもありましたが、過去の自分と今の自分がうまく混ざり合って「一つの自分」になっていきました。それはいつてみれば、出身国や人種、あるいは宗教にとらわれずに、自分自身の考えや価値観のもとで「自分」になっていく道でもありました。この「気づきの旅」は、終わりのない旅かもしれません。世界につながる道を進み、橋を渡っていく旅です。

このような経験は多様なアイデアや、たくさん人の選択肢、可能性を示してくれます。このグローバルな社会を生きていく私たちは、これらの多様な価値にふれ、多様なあり方を学びます。国際社会を生きる私たちは、これらの経験を通して常に自分自身を磨いていく必要があるのです。

〈出典 『私、日本に住んでいます』(岩波書店、二〇一七年)〉

【著者】 スペンドリニ・カクチ

一九五三年

ジャーナリスト。スリランカの生まれ。

【著書】 『あなたにもできる災害ボランティア 津波被害の現場から』など

2 【マイノリティー】少数派。
11 【グローバル】規模が世界的であること。